

尾瀬

第 20 号

尾瀬の自然を守る会

指導員室内講座開かれる！

三月一日（日）、農大一高にて、筑波大学講師でオーダムの生態学を研究され、第八次、十次の南極観察にも参加された三島次郎先生を御招き

要旨

自然保護という基本的な定義をする前に我々のまわりの生物的自然のあり方みたいな事を考えてみましょう。たとえば、都会からツバメがいなくなったり、少くなくなったり、昔の様に東京の街にツバメが飛んできて欲しいという声がおこってくる。ツバメを戻す会などが結成され、都会へ来る色々な条件が研究される。生物である以上、食べ物の確保というのが最たるものとなるだろう。この辺のところから小さな問題でわかりやすい、又非常に我々が考えなければならない大きな問題にぶつかる。ツバメの餌とは生きた昆虫で、どちらかといふと人に好まれていないかやハエ・ガである。このようないくつかの評価がある。ツバメは益鳥と呼ばれいい評価が与えられる。極端に言うと、ツバメを街にとりもどそうと

しておこなわれた。「生態学の立場から自然保護を考える」という講演が二時間余りおこなわれたので要旨を掲載する。

旨

いうのは、夏の夜に縁台で将棋など指しているとたくさんのが寄ってくる。食卓の上は黒くなるほどハエが飛んでいるなどの、ツバメの住みよい世界が展開される。虫を街のなかにたくさんふやそうという事と同じになる。当然こういう図式というのはでてくる。

簡単に書いてみますと、私たちがツバメというものを取り上げる時、ツバメと昆虫といふものが一つのまとまりになつて生活している。が、これを切り離して考えるような取り上げ方が我々の限りに展開している生物的自然である。当たり前のことなのだが、この事になかなか気がつかない。自然界のあらゆる生物はセットになつて存在する。自然というものを考える時、この事をしつかり頭に入れておきませんと最後の方にいつて変な事になる。もう一つは、ツバメと昆虫といふのは生

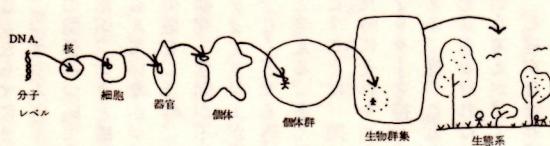
うのは生態的に考えると、ある場合それが種であり、グループ（群）というか個体群といふのかもしれません。ですから、まとまりとなつてツバメと昆虫がセットになつているのは

問題と細胞レベルの問題とが

生物の世界で個体といふのは、極めてまとまりのいいユニット、あるいはシステムです。

又、器官のシステムでもある虫がセツトになつていては、さらに生群集でもある有機的なつながりを求めればこれもシステムである。我々は一個体の生物である。これはカエルの体を考えてみると一番簡単ですが、一匹のカエルがいます。腹の内を開いてみると、いろいろな部分品からできている。いくつかの部分品（パーツ）が集まつて一個体ができる。生物学的には器官といふ。カエルという一個体はたくさんある器官が集まつてカエルといふ。生物の世界で個体群といふのをつくつて、これが個体群になつてさらに大きなまとまりをつくり、生物群集（バイオティック・コンミュニーン）と呼ばれる。さらにこの上に、エコ

図 1



システム（生態系）といふまとまりになる。仮に皆さんがあるきりカエルを知らずに、カエルを勉強していこうとしても。カエルをつかまえ腹をさいて、器官のレベルまで分解しまして、これが心臓で、まだ動いてます。これは血液という赤い液体を動かすポンプです。なんう講義を二時間ぐらいたとします。この部品が全部あつまるとカエルになります。皆さんカエルについて良くわかつたでしょう。はいさよならと帰ってきたらば最低の教え方をしている事になる。下のレベルから上のレベルのことについては絶対わからないでしよう。ですからカエルという事について勉強しようと思うならば、一番いい方法は、ここにカエルを持つてきて、ハイこれがカエルですと、尻をたたけばビンと動く。アマガエルは足に吸盤があり、トノサマガエルはジャンプする。これらをみてから、カエルが生きていくために解剖して、腹にこんなものがつまつてますよといふようにする。全体からものごとを理解する時必要な事は、全体から部分について学ぶ事。

もちろん部分を学ぶ事により正解に全体像を学ぶことへフィードバックさせる事はできる。全体を知らない者にとって、下のレベルから上のレベル（部分から全体）へというやり方は非常に危険です。個体以上のレベルでも同じ事がおこなわれる。動物や植物の名前をおぼえて今日は自然の勉強をしたという。個体や種のレベルの勉強である。そこでエコシステム・アプローチ（全体から部分へ）つまり生態系からの入門といふことです。又、生態系といふのは原始的自然の同意語でなく、部分から見て全体としてのまとまりのシステムがあれば、都会には都會なりのエコシステムがあり、原始的自然のなかには原始的自然のエコシステムがある。

る構成要素が適正に配置されていなければいけない。さらに入れエネルギーが存在するのがシステムである。システム的に自然を考えた場合、こんな部分品が一つぐらくなくなつていいという考え方はある。それは全体を動かすうえでの構成要素の役割をはたしてある。一つでも欠けると全体の形がかわってしまう。自然保護という事を私なりに議論してみましょう。珍らしい草や樹がある。あるいは樹令何百年という大きな木がある。確にこういう物を大切にするのも大切であるが、種や個体レベルの保護である。昔の天然記念物の考え方と結びつくのです。又、囲りが変化していくことにより巨木や珍種がだめになる。そういう生物が住んでいる地域を定めて保護する。（地域保護）。しかしこれは拡大された珍種・巨木主義である。こういう所からトントボの珍しいのが住む沼があり、埋めるところ100万人位が住めるとなると必ず人間かたしかにシカはふえたが、餌

ンボかという問題がおこります。そういう圖式の議論が正当な議論であるかどうか考えてみないといけないでしょう。そこで一つの方法として、我々の住んでいる地球という規模で自然保護を考えます。人間は地球というものを利用している。地球上に展開する色々な生態系、そのあらゆる生物的存在を含めて、それは全体を動かすうえでの構成要素の役割をはたしてある。一つでも欠けると全体の形がかわってしまう。

自然保護という事を私なりに議論してみましょう。珍らしい草や樹がある。あるいは樹令何百年という大きな木がある。確にこういう物を大切にするのも大切であるが、種や個体レベルの保護である。昔の天然記念物の考え方と結びつくのです。又、囲りが変化していくことにより巨木や珍種がだめになる。そういう生物が住んでいる地域を定めて保護する。（地域保護）。しかしこれは拡大された珍種・巨木主義である。こういう所からトントボの珍しいのが住む沼があり、埋めるところ100万人位が住めるとなると必ず人間かたしかにシカはふえたが、餌

の植物がたらずにならぬ数がへった。つまり人とオオカミとシカの関係については理解していたが、シカと植物の関係はとらえていたかった。そういう失敗をした時、自然に対する研究・学問が不足していました。テクノロジーが不足していました。こんどやる時はうまくやると考える。多くの間違いをおこすことは、間違いをおこした時にそれを回復させるテクノロジーを持つていない時がある。保つことと言うのは、わからなければ放つておけという考えがでてくるのである。私達が自然界に手をつけようとする時100%安全だということは科学的に言えない。今度やる時はうまくやるぞという考えは非常に危険である。といつても相当研究すればできるかもしれない。それは純粹に技術・学問の問題である事を認識しておくことが必要である。学問・研究・技術といふものがうつかりすると大きな落穴を持っている。アメリカの草原でシマウマ・カモシカなどの数が減った。それがゲームハントティングによりシカの数が激減した。その時人はしばらくの間ゲームハントティングをやめた。さらに捕食者であるオオカミを退治した。ライオンはシマウマをたくさん

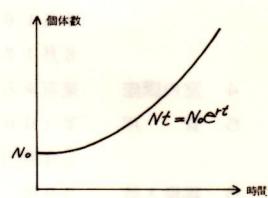
ん食べるので退治する。その退治した分のシマウマをヒトがとつても自然のなかで利用しながらうまくシステムが運営できるという。一見数字の上ではあつてゐるのです。ライオンがとるシマウマは病気や子供・年寄りなどを食べる。そこでヒトが鉄砲でそういうシマウマをとりのぞいてゆく。

しかしライオンのようになにかで繊密にはいかない。結果はまるつきり違つたものになる。望む姿とは何か。今日、私は生態学の立場からと言いまして、それを離れて議論しなければならないでしょう。地球の上に人類が誕生してから我々のもつてゐる技術・学問・研究とかいうもので文明による進歩の方向で今まで進み繁栄してきた。これからもこれでいこうとする時、昔の進歩に対して逆の形の進歩、別の方法を考える。つまり発想の転回をする。例えば、地球に何人住めるかと言う時に、我々はどういうふうに住むかといふ生活の質や生き方を変える。逆に生き方を規定しなければ何人住めるかという答はでてこなさ。 $N_t = N_0 e^{rt}$ という式をみたことがあるでしょ

う。ネズミ算です。 N_0 から出発しても時間後のネズミの数です。計算すると、三年間で数十億になりますが、こんなバカな事は実際ないわけです。生物にはチキンゲンメカニズムがあるわけです。ところが人間には働かないのです。そこで我々自身がコントロールしなければならない。人口の増加はネズミ算のグラフ(図2を参)と同じになつてゐる。

我々自身が我々自身のことを、人口の問題も含めて考えなければいけない。何を食べて生きていくのか、何の為に人はそんなに数をふやさなければいけないか。もう答を出したる時代は終つた。地球上の人達が幸せかどうかわからぬがアフリカの人達の様な生き方をしたらまだ一万年も二万年も地球上で生きていくだらう。この100年の間

図2



に我々人間がどれだけ地球の資源をつかい、エネルギーをつかい、地球の上を変えていつたかということをふまえ、あと一萬年たつたら地球はどんなになつてゐるだらうか。ホッテントットやビッグミーノなどのアフリカの土人は一万年も何万年も前から同じ生き方をしている。原始の生活にもどりといつてゐるのではない。そういう生活をすれば誰でも一万年も二万年も先に人類の滅亡があるとは思わないだろう。我々が環境を変える力というのはものすごく大きいのです。なぜそれを都会にしなければならないのかというふうな価値感の転回をしなければいけない。ふと立ち止つて進歩しない進歩とは何かということを考へるところにある意味で自然保護の原点があるのでないか。けつして原始の発足当所から会の連絡所として事務局的な仕事一際を引きうけて下さり、会の運営上柱になつていただいた太田和さんが、一月の例会の際辞意を申し出られました。御高齢でもあるし、十年間と云う長い間の御苦労を思うと、無理に引きとめるわけにもまいりませんので幹事會で

太田 和さん 御苦労さま

了解していただきました。

発足もないころの不眠不休でやつたころ、数年前の会の沈滞期もどうにか本会が続けて来られたのも太田さんに負うところが大きいと思います。長い間太田さん本当に御苦労様でした。今後も尾瀬の自然をとりもどそうという自然保護のためにお力をぞえ下さい。有難うございました。

会の発足当所から会の連絡所として事務局的な仕事一際を引きうけて下さり、会の運営上柱になつていただいた太田和さんが、一月の例会の際辞意を申し出られました。御高齢でもあるし、十年間と云う長い間の御苦労を思うと、無理に引きとめるわけにもまいりませんので幹事會で

に教育されていると思われる。

結論的に言つてみると進歩しないといふ進歩、これはどうかといふ考え方がある。又、虫が飛んでくる自然のなかに住める事に感謝する人がいるだろうかということ。ほんとならもつと自然を好きな人がふえなければいけないので何人位いるのだろうか。自然のなかにあそびまわる体験がなくて自然と親しむという子供達がいなくなつてゐる。そういう体験を通じての自然の理解という原体験として、理屈でなくて自然が大好きだという人がいましよう。チョウやゴキブリがこわくて泣いたりふえたりする大人や子供がいる。日、一日として自然とはなれていく。現代の人間は自然がなくとも生きていけるよう

虫剤をまくか、網戸をはめるかという考え方がある。又、虫が飛んでくる自然のなかに

住める事に感謝する人がいるだろうかといふこと。ほんと

いうことかとふと立を止まつて考えられる我々になろうと

いう事。家の周りの雑草が水を保全し、酸素を供給すると

いうような役割りを考えられることができる人達。そういう人達がふえたときにこそ、我々のエコシステムをどんな姿にしなければいけないかと

いうことにある種の同意、人間の生き方を決める一つの合意ができたということになる

でしょう。より自然の好きな人が多ければ、こういう生き方をして、そういうふうな結論ができると思う。

**第4回（昭和56年度）
尾瀬自然保護指導員養成講座実施案内**

本年度も以下要領で「尾瀬自然保護指導員養成講座」を開催致します。有能な指導者の育成と自然保護の推進が目的です。この趣旨に御賛同の方はぜひ御申込み下さい。

- 1 主 催** 尾瀬の自然を守る会
- 2 期 日**
 - I 現地研修 昭和56年8月14日(金)～17日(月)
 - II 室内講座 昭和56年9月27日(日)
- 3 日 程**
 - 8月14日(金) 沼田(9:40集合)→尾瀬沼畔(泊)
 - 8月15日(土) 尾瀬沼→尾瀬ヶ原(泊)
 - 8月16日(日) 終日尾瀬ヶ原にて指導研修
 - 8月17日(月) 尾瀬ヶ原→戸倉→沼田(15:30反省会等・解散)
- 4 室内講座** 東京あるいは高崎にて予定
- 5 費 用** ￥20,000.-
(含沼田よりの交通費・資料代・保険等々)
- 6 募集人員** 20名
- 7 応募資格** 尾瀬の自然保護に強い関心を持ち、尾瀬の自然保護のための自然解説・自然保護活動等のボランティア活動に積極的に参加する意志のあるもの。
- 8 応募方法** 以下項目をB5版のレポート用紙・原稿用紙・便箋に書き下記あて御申し込み下さい。
 - 1.氏名(ふりがな) 2.年令 3.性別 4.職業 5.現住所 6.電話番号 7.郵便番号 8.昭和56年4月より9月末日までの連絡先(住所・電話番号等) 9.尾瀬入山回数 10.1ヶ年当りの自然との接触回数 11.上の10の具体的接觸方法 12.自然観察会等への参加の有無 13.尾瀬の自然保護のため、あなたは何ができますか。
- 9 応募に関する問い合わせ**

月～金の午後3時～5時
 東京農業大学第一高等学校(内海) 03-425-4178
 駒場東邦中高等学校(河内) 03-466-8221
- 10 申し込み先** 〒156 東京都世田谷区桜3-33-1
 東京農業大学第一高等学校生物教室内 尾瀬自然保護指導員養成講座係宛
- 11 申し込み〆切** 昭和56年6月末日必着
- 12 参加の許可** 書類審査の上、受講許可者には直接本人宛連絡致します。
- 13 資格の認定** 現地研修・室内講座を受講した者には講座修了証を、さらに、尾瀬自然保護指導員としての資質ありと会が認めた者には「尾瀬自然保護指導員」としての身分証明書を交付致します。
- 14 講 師** 松村幸雄 内海広重 八木幸市 他

昭和56年4月1日

尾瀬の自然を守る会

代表 岸 好 人

十年記念事業に関する今後の予定

結成十周年を期して、この十年間の総まとめと、今後の会の発展を目して本年秋に十周年記念事業として写真展を計画し、広く会員諸氏にも御協力を呼びかけた訳ですが、その後三ヶ月の間の進行状況を見ますと、行手は決して楽観視できるものとは言えません。予定どおりに事を行なおうとすれば、残された時間はあと六ヶ月しかありません。今のところ、当初予定していたような写真の収集状況は皆無と言つてよい状態です。

特に、戦前の写真となりますと、当時の世情からして、尾瀬に入山した人も少く、さらには写真を撮つた、という人にればそのうちのごくわずかな人になり、撮影者探しもまたになりません。

昭和三十年から四十年代になれば若干数が集つておりますが、今の状態でははじめに計画した、過去と現在との比較から尾瀬へ保護を考える、といつた企画はどうていかなえられそうにありません。

さらには、資金的にも、予定通り行なおうとすれば、少

くとも二百万円は下らない多額を要すると思われるところ、

その資金繰りの目処も立つております。

なつても、この方面的活動は気長に、しぶとく続けて行きたいと思います。今後も、尾瀬に関する資料に接する機会

燧岳観察会のお知らせ

群馬支部主催で、一般の方を対象に燧岳観察会を行います。集合七月十九日(日)午後三時尾瀬沼畔環境庁ビジターセンター前、翌二十日(月)燧岳観察の後、大清水にて午後四時頃解散、費用は交通費を除き会員五千五百円、非会員六千円、申し込みは内金二千円をそえて、現金書留または振替にて、群馬県玉村町上新田二七玉村中央公民館気付高井昭先、振替長野一三三三二五、問い合わせは係高井昭(○二七〇一六五一三五一六)まで、

。武繁春(電屋)〇四五一二〇一
一一一一一神奈川県商工部氣付夜〇四六五八一
一一七六三自宅)

。河内輝明(電屋)〇三一四六六一八二二一駒場東邦汽付夜〇三一四二二一三四六六自宅)

指導員対象の観察会を行います。集合五月三日(日)午前六時関越交通戸倉営業所前、解説五月五日(火)午後二時戸倉、内閣三一三三一、東京農大第一高等学校生物教室気付、内海広重(○三一四二五一四一七八内三一)

の教訓を得たと思します。それは、資料収集のむずかしさちは、この企てを通して一つ申し込み〆切は六月末日。

なお、申し込み内金は、理由の如何にかわらず、お返し致しません。

鬼怒沼原湿原観察会のお知らせ

集合は七月四日(土)東武鬼怒川温泉駅午前十時半(厳守)四日は奥鬼怒温泉泊、翌五日(日)に鬼怒沼原へ行き、午後三時半頃大清水で解散、費用は交通費を除き会員五千円、非会員五千五百円、申し込みは内金三千円をそえて左記(燧岳観察会と同じ)に、四月十五日(火)までに。問合せは保三枝欣司(○二七三一六一三八一三)まで。

なきに至つたとしても、私は、この企てを通して一つの教訓を得たと思します。それは、資料収集のむずかしさちは、この企てを通して一つ申し込み〆切は六月末日。

なお、申し込み内金は、理由の如何にかわらず、お返し致しません。

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は

日本における自然保护運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保护を考え、学び、行動する「市民の会」であります。昭和四十六年八月尾瀬を通る国際観光ルート沼田一田島線建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら会員の努力によつて、運動は続けられております。

尾瀬を愛する皆さん、小さな力でも合せれば、一粒の雨滴が大河になるように大きな力となります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして、日本の自然を守り、いつまでも心豊かな人間生活を送ろうではありませんか。

会の事務局 156 世田谷区桜三一三三一、東京農大第一高等学校生物教室気付、内海広重(○三一四二五一四一七八内三一)

入会の方法 年会費(一月一十二月)一、〇〇〇円を会の会計へ振替でお納め下さい。会の主旨に賛同する方はどなたでも入会できます。

会の会計 260 千葉市作草部八六四一五〇三(松田方)

振替 東京 6-138023

環境週間へ向けて

風物詩

入山者調査を兼ねて、ゴミ持ち帰りを呼びかけ、指導員の質向上のための現地研修を行います。指導員の方は奮つて御参加下さい。合せて一般の方も。集合は六月六日(土)午前十時上越線沼田駅前、翌七日(日)～八日(月)にかけ、尾瀬の利用の現状の観察等、解散は八日(月)の午後。詳細の問い合わせは、五月二十四日(日)までに係阿部秀利(〇四二七一三四一〇二八〇)まで。

団体指導講師依頬のお願い

今夏も例年通り、七月下旬より八月上旬にかけて、いくつかの団体より、入山現地指導の希望が届いております。

本会自然保護指導員の方々にあつては、万障お繰り合せの上、よろしく御指導の程お願ひ致します。

今のところはつきりとしているものは、七月二十四日(金)二十五日(土)、二十六日(日)、二十九日(水)、三十日(木)の五件です。お引き受けおよびコース・日程等の詳細は係岸好人(〇三一七〇四一二三九三)まで。

日(日)～八日(月)にかけ、尾瀬の利用の現状の観察等、解散は八日(月)の午後。詳細の問い合わせは、五月二十四日(日)までに係阿部秀利(〇四二七一三四一〇二八〇)まで。

例会案内

○四月の例会 四月三日(金)

於 東京山手教会 午後六時半より九時頃まで テー

マリ湿原の生態学 係 II 武繁春(電〇四六五一八一)

一七六三) 時半より九時頃まで テー

五月の例会 五月八日(金)

於 東京山手教会 午後六時半より九時頃まで テー

マリ尾瀬の利用の現状(ゴミ問題を中心) 係 II 阿部秀利(電〇四二七一三四一〇二八〇)

○七月例会 七月十日(金)

於 東京山手教会 午後六時半より九時頃まで テー

マリ北欧の自然 係 II 内海廣重(電〇四二七一四五一)

○八月の例会 八月二日(金)

於 東京山手教会 午後六時半より九時頃まで テー

マリ自然観察指導の実際(自然観察入門・中公新書を参考文献としてお持ち下さい。また、今までに行つた観察会等のスライド・ティースト・観察手帳等も資料としてお持ちいただければ幸です) 係 II 河内輝明(電〇三一四二二一三四六六)

○八月の例会はお休みいたします。

例会 漢谷山手教会において、午後六時半より



ナリシギとも呼ばれている。
オオジシギは、北海道の平原や本州中部以北の高原の草地で繁殖し、尾瀬では下田代と赤田代や山ノ鼻周辺でよく見られる。嘴は細長いが体

あり、春とはいえ、まだ雪立つと、突然頭上真近に急降下してくる黒い影に驚かされることがある。これは、オオジシギという名のシギの繁殖期にみられる習性で、急降下の際に尾羽がふるえてザンザンと音をたてるのでカミ

ズビヤーフ、ズビヤークと鳴きながらオオジシギが盛んに急降下をみせる頃、湿原の

華麗な姿が競つて人目を引くようになる。そして、七月。彼らのこうした行動がみられなくなると、湿原の夏ももう眼の前に迫っているのである。

編集後記

会の事務局変更

今回の編集は大変でした。

シーザンを前にしてといふこととあつて、各種お知らせのオンパレードです。元原稿と大部分がつてしまいしません。

また役になってしまった分も次号で掲載致します。JUN



事務局	編集者	尾瀬の自然を守る会会報
生物教室内	河内輝明(〒1543一三一)	発行日 昭和五十六年四月
東京農大第一高等学	八一一四電〇三一四二二一三四六六	発行者 岸好人(〒158世田谷区深沢五一一)
七八内線三一	四一二三九三	世田谷区下馬三一三
東京農大第一高等学	東京都世田谷区桜	十ニ二電〇三一七〇

入会申込書	年月日
1年会員費 2,000円を添えて申込みます。	
名前(ふりかな)	男 女
現住所	
T()	自宅電話()
M S	年 月 日 生
勤務先	電話()